

今朝の礼拝のための日課には、有名な「やもめの献金」と「神殿の崩壊の予告」が記されています。この出来事はAD30年頃と考えられ、神殿工事はAD64年には完成していますが、この石垣が災いしてローマ軍が攻めて来てAD70年には神殿が破壊されました。64年に完成し70年に破壊されたのですから、83年かけて建築しても6年の寿命でした。貧しいやもめが精一杯生活費を切り詰めてレプトン銀貨2枚を捧げ、金持ちは自分の人生が成功であることを示すために沢山の金貨を捧げました。しかし、それほどまでにして建てた神殿なのに、かえって災いをもたらし、破壊されてしまったのですから、建物や形ある物で信仰を表現したり、自分の人生に意味を与えようとするのは空しいことだとイエス様は言われたのだと思います。

日本の多くの仏教が共通して唱えているのは「般若心経」です。「色即是空、空即是色」は誰でも知っています。「色」は目に見えるもの、形あるもの、華やかなもの、というような意味です。「空」は空しい、実体がない、というような意味です。聖書にも非常によく似た言葉があります。口語訳聖書「伝道の書」の1:3に「空の空、空の空、いつさいは空である」と書かれています。新共同訳聖書ではコヘレトの言葉1:2で「なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい」と訳されています。インド仏教の教えが西に伝わり、旧約聖書の知恵文学に影響したのでしょうか。私達が理解している以上に仏教とキリスト教は互いに影響を与え合っていたのかもしれませんが。「色即是空」、形あるものはみな空しい、という教えは、イエス様ご自身が教えられたとも考えられます。

内村鑑三が「後世への最大遺物」で誰にでも出来て、利益ばかりで害のない遺物は、この世の中は決して悪魔が支配する世の中ではなく神様が支配する世の中であると信じて、失望の世の中ではなく希望の世の中であり、悲嘆の世の中ではなく歓喜の世の中であるという考えを生涯に実行して、その生涯を世の中の贈り物としてこの世を去るということだと書いています。

イエス様は、形ある物や誰もが欲しがめる美しさや、若さや賢さや成功を自分の価値として求めて生きるのではなく、たとえ業績を残すことが出来なくても、若さが日々薄れて行こうとも、神様に自分は生かされているということを楽しんで生きることこそ一番大事な人生の遺物だと言われたのではないのでしょうか。これこそ私達が生涯をかけて建築しなければならない神殿です。